

## ボストン美術館蔵円覚経变相図について

九州大学大学院人文科学府博士後期課程 柳 尚秀

ボストン美術館が所蔵する円覚経变相図は、『大方広円覚修多羅了義経』(以下、円覚経)を典拠とする高麗仏画の優品である。本図は、まず背景上空に花で囲まれた卍字、その両側には降下する飛天が描かれる。そして諸尊の集まる楼閣は、湧出雲が立ち上ることから説法空間であることがわかる。ここでは、獅子に乗る文殊菩薩と象に乗る普賢菩薩を脇侍に従えた主尊が、宝冠を戴き、結跏趺坐の姿勢をとる菩薩形の如来の姿で中央に鎮座する。主尊は、両肘を腰横で曲げて指先を外に広げ、掌を開いて第一指と第四指を捻じる説法印をとる。これら三尊の前には、十大菩薩が左右に分かれて対称に坐し、さらにその前方では、如来に向かって跪く菩薩形の聴聞者が中央に位置する。また、十万鬼王、八萬金剛、四天王、梵天・帝釈天・二十八天王がこの聴聞者を圍繞している。

かつて藤本真帆氏やユキオ・リピット氏は、ボストン本との比較として安岳や大足地域に現存する宋代の円覚経变相の造像を取りあげられ、本図の図像解釈を試みられたが、四川地域では智拳印を結ぶ如来形の主尊が主流となっていて、必ずしもボストン本の図像と一致しているわけではない。近年、常青氏は、本図の主尊にみられる図像が北宋の乾興元年(1022)に遡る杭州飛来峯第五龕の盧舎那仏会像の主尊と共通する点に注目され、両者が毘盧遮那仏ではなく盧舎那仏であることを確認し、あわせて菩薩形の盧舎那仏を主尊とする華嚴三聖の図像が宋代において華嚴教学の中心地であった杭州から四川や高麗に伝播したとの見解を主張されている。

本発表では、常青氏の見解を支持しながら、さらに議論を発展させ、本図の主尊が盧舎那仏でなければならないことの具体的な論拠を三身仏の議論と結びつけて明確にする。次に本図を特色づける全体構成において、『円覚経』とあわせて浄源『円覚経道場略本修証儀』が参照されていることを明らかにし、高麗仏画における中国の受容が、図像や表現にとどまらず儀礼をも含んだ総合的な理解のもとで行われたことを指摘する。

議論の手順としては、まず中国における三身仏の図像の中から盧舎那仏の図像を如来形、宝冠如来形、菩薩形の三種に分類し、その特徴を明らかにする。さらに三種の図像の時代的かつ地域的な分布を分析し、11世紀から14世紀にわたる盧舎那仏の図像の展開を跡付け、それが『梵網経』の教主である盧舎那仏や『円覚経』の主尊へと波及していった可能性を提示することにした。